

ノンフィクション作家・写真家

星野博美さん

今回は、ノンフィクション作家・写真家の星野博美さんにお話を伺った。星野さんは、1980年代からたびたび中国・香港に滞在し、改革開放政策に翻弄される中国人や、中国返還に揺れる香港人の生き様を描いたノンフィクション・写真集を発表されている。そんな星野さんに、庶民の目線で見た中国・香港の姿や、作家・写真家としての仕事についてお話を伺った。

(聞き手：山添 健之 写真：望月 誠)



— 星野さんが中国を作品のテーマに選ばれたきっかけはどのようなものだったのですか？

特に、これといったきっかけがあったわけではないのです。単純に言えば、子どもの頃から餃子が好きで、餃子を生んだ中国という国を20年間近く考え続けた結果、というところでしょうか。他には思春期の頃、社会主義の「様式美」にひかれた、ということもありますね。カーキ色の人民服や壮大な社会主義建築、それらについている赤い星が「かっこいい」という思いが、ふくらんでいった、そんな程度のことなんです。立派な動機などありませんでした。

— 著書の『謝々！チャイニーズ』では、1990年代はじめの中国華南地方を旅行された経験をお書きになっていますね。

当時、中国の福建省からの密航者が増加しているというニュースをたびたび目にして、なぜ福建省からこれだけ密航者が出ているのかということ疑問

に思ったのが旅のきっかけでした。

旅行中、次の街を目指して冷房もないオンボロのバスにのって山を越えると、突然目の前に、高層マンション群が見えて来る。それらは皆、中国から日本やアメリカに「出稼ぎ」に行った人たちの家族が住んでいる高級マンションなのです。他の人たちは、それを見て、海外に出稼ぎに行った人たちが故郷に送金する金の威力を知り、海外に思いをはせる、という状況にありました。一方で、海外から送金される大金を目当てに故郷の家族を誘拐して、身代金を要求する犯罪が多発するなどのゆがみも、すでに生じていました。

— 日本人の感覚では、海外に行くよりも国内の大都市で稼いだ方が手軽で安全だ、という気がしますが。

当時の中国は、都市戸籍と農村戸籍がはっきり分かれていて、地方の人間が大都市に定住して同等の権利を得る、ということは事実上不可能だったんです。それに円の強い時代でしたから、日本でひと月

働けば簡単に中国での年収くらいは稼ぐことができた。外国と中国の経済格差が密航に拍車をかけたわけです。また、南中国の沿岸部にはもともと華僑を多く送り出した歴史があります。海の向こうには違う世界が広がっている、という精神性が自然と身についているのでしょう。

— 著書で星野さんは、社会主義の中国を旅行して、資本主義の厳しさを学んだ、とお書きになっていますね。

私は1966年生まれで、幼少期に高度経済成長を経験して、学生時代にバブル景気を経験したので、自分は資本主義を身につけている、と思い込んでいたのです。でも、当時、華南地方を旅行して、市場や人々とのやりとり等を通じて、「原始資本主義」の厳しさを、中国の人たちと一緒にたたき込まれました。自分の知っている資本主義は、漠然とした、抽象的なものでしかなかった。

現在中国では経済格差の拡大が問題となっていますが、当時は、改革開放政策の「走り始め」で、みんなが一斉にスタートラインに立って「夢」を見ている、という状況だったと思います。ただ、中国の人たちはあまりに短期間に経済成長を経験し、資本主義を学ぶ時間が少な過ぎたせいで、資本主義を「拡大解釈」し過ぎている点がとても心配です。

— 星野さんは1997年9月1日の香港の中国返還を挟んだ約2年間をはじめ、たびたび香港にも滞在されていますね。

返還前後の香港は、日ごとに何かがなくなっていたので、それを残したいという気持ちが強かったですね。再開発の名の下に啓徳空港も九龍城もなくなってしまった。とても残念に思います。

香港はとても不思議な街で、経済状態や出身地等ですみ分けがとてもはっきりしている。今は香港生まれの香港人が増えているので状況は変わっていますが、香港に密入国して以来、一度も電車に乗らずに、自宅の周囲数百メートルの範囲で一生を終える

人もたくさんいました。

香港は、社会主義国家中国に対する資本主義のショーウインドー的な性格が強い街だったので、より資本主義色が強くでているのでしょう。とてもシビアな世界で、会社に勤めていても、「明日から来なくていい」と言われることはざらにある。組合なども存在しない。「悔しかったら金持ちになれ」ということです。

一方で、香港の人々の間には、助け合いの精神が根付いています。植民地だから政府の福祉を全くあてにできないので、同郷の人や、友人・家族のつながりをとても大切にする。昔は、香港各地に「○○村会館」のような同郷者会館があり、その村出身の人であれば、そこでとりあえず面倒を見てもらえた。中国本土に生活している中国人よりも、国外に出た中国人のほうがむしろ、同郷・家族のつながりをより大切にしているかもしれません。

— 20年近く継続して中国・香港と関わってきて、感じることはありますか。

中国でも、天安門事件を知らない世代がどんどん増加していて、世代間ギャップの大きさは日本の比ではないと感じています。祖父母の世代が文化大革命で苦勞して、父母の世代が天安門事件を機に「自由よりも経済」の価値観をたたき込まれ、天安門事件を知らないその子どもたちが、すでに20代になりつつある。私でさえ、今の20代の中国人と話していると、すごいギャップを感じますね。昔話をしているおばあさんの気分になる。

最新作の『愚か者、中国をゆく』でも書いたのですが、日本が第二次世界大戦に敗戦してから東京オリンピックの開催までの期間と、中国で天安門事件が起こってから北京オリンピック開催までの期間は、19年2ヶ月と、符合しているんです。

日本では、敗戦でそれまで信じて来たものが全て否定されて、その後は余計なことを考えずに一生懸命働くことが最大の価値観となり、そのピークに東

京オリンピックがあった。中国では、天安門事件によって政治的自由よりも経済活動の自由を重視する価値観がたたき込まれて、中国全土が経済成長に邁進し、その成果発表としての北京オリンピックがある。両国の歩みはとてもよく似ている。

日本も高度経済成長期に環境破壊や公害等のさまざまな弊害が生じていたのに、それを見て見ぬふりをしてきた。見てしまうと、立ち止まってしまうからでしょう。今の中国もそういった状況にあると思います。

東京オリンピック後の日本人が、経済発展のもたらした弊害に直面し、「本当の幸せとはなんだろう」という苦悩に直面したのと同様に、これから中国人も同じ苦悩に直面するのかもしれない。

— 星野さんが旅行をする際は、作品のテーマを決めてから旅行を始めるのですか？

最初から、これを書こう、と思って旅行すると、どうしてもそれに縛られて目が曇り、それ以外の発見ができなくなるんですね。あらかじめ、自由でいられなくなる。それよりも、何も考えずに、来るものを受け入れる、という感覚で旅行しています。旅行中は、忘れないために写真を撮り、日記のようなものを書きためて、日本に帰ってから1年以上かけて整理して、本のイメージができるんです。ジャーナリストと呼ばれる人たちの仕事のやり方とは全く違うと思います。こんなやり方を許容してくれる会社はどこにもないので、ずっとフリーでやっていますが。

— 写真家の仕事と作家の仕事の違いとは？

写真は、文章を書くより、本能に近いものです。その場に立った瞬間の感覚で撮るので、頭から解放されて表現できる。だから、旅の途中は一にも二にも写真優先なんです。旅行中に頭を使いすぎると、旅がつまらなくなる。頭は日本に帰ってから使うようにしています。

— 星野さんは、写真家の橋口譲二氏らと一緒に、APOCC (アポック)※というNGOを設立されていますが、設立のきっかけや、活動の内容をお聞かせください。

きっかけは、2000年に国際交流基金から「インドで何かやらないか」という話が私の師匠である橋口譲二さんのところにあったことです。私たちが何ができるかを考えたとき、インドの子どもたちにカメラを持ってもらい、5日間写真を通じて自分と向き合ってもらい、という試みを思いついたのです。実際インドでワークショップを開いたところ、大きな手応えがありました。それで、継続的にワークショップを開催するためにAPOCCを設立しました。

— 手応えとはどのようなものだったのですか？

インドの子どもたちは、家の仕事の手伝い等で、自由な時間をもったことのある子どもが本当に少ない。そんな子たちが、5日間のワークショップに参加して、自由に自分のことを考えていい、という時間を経験するのです。さすがに1日目は、わけもわからず写真を撮るのですが、その写真について子どもたちと「これが君の写真のいいところだね」「君の個性はこんなところにあるね」といった話をする。翌日、彼らの姿勢や撮ってくる写真がめざましく変化している。おそらく、今まで「自分の存在を認めてもらう」という経験をほとんどしていなかったからでしょう。

去年はベトナムでワークショップを開催したのですが、たまたま、学校に行っている子どもと、行っていない子ども両方を対象にすることができました。学校に行っている子は、普段からいろいろな課外活動を経験している子が多く、そのような経験の一つとして軽い気持ちで参加した子が多かったようですが、学校に行かずに働いている子どもは、このワークショップが「一生で一度の自由時間かもしれない」という気迫があって、その集中力はすさまじいものがありました。中には写真を撮った後に気力

写真は、文章を書くより、本能に近いもの。
瞬間の感覚で撮るので、頭から解放されて表現できる。
だから、旅の途中は一にも二にも写真優先なんです。
頭は日本に帰ってから使うようにしています。

星野博美

を使い果たして倒れてしまうような子もいました。そういう子どもを見ると、年齢的には子どもなんだけれど、子どもとして自由に遊ぶ時間がもてなかったのだな、ということをすごく痛感させられました。

子どもたちにとっては、ワークショップの5日間は、童心に返ってもいいという「子どもの時間」であると同時に、自分と向き合う「大人の時間」でもあるのだと思います。とても不思議で濃密な時間です。

— おそらく、カメラを手にするなど初めて、という子どもが多いと思うのですが、うまく撮影できるのですか？

写真というのは、今はカメラの発達で比較的簡単に撮れるようになっていて、その人が受けてきた教育や、持っている情報とは関係なしに、本能で直接表現できる稀有な表現手段なんですね。なので、時々本当にびっくりするような写真を撮ってくる子どもがいるんですよ。私など「明日からカメラマンやめます」って言いたくなるような素晴らしい写真を撮る。きっかけさえあれば才能を発揮できる子どもたちはいっぱいいることを毎回痛感させられます。ただ彼らにはこれまで、機会がなかっただけです。

私たちは、子どもたちに絵を描いてもらうというワークショップもやったことがあるのですが、絵はどうしても、ある程度の技術が必要なんです。そうすると、絵を勉強したことのある子と、ない子ども

との間では、歴然とした差が出てしまう。いくら私たちが、個性的な点をほめても、技術の上手・下手の差は埋められないんです。そういう点で、写真はとても民主的な表現手段だと思います。

— 弁護士の仕事について、ご意見はありますか？

本にしる、写真にしる、それを作り出す人はものすごい時間をかけて自分のオリジナリティーを追求し、それを発表して生活しているわけですね。それを「安ければいい」という考えでオリジナリティーを軽視するような風潮がますます強くなっていることに憂慮しています。コマーシャルにも写真家の作品のコピーが氾濫しています。ただの商業と、文筆業や写真家の仕事は、一緒にはできない。そのような点で、弁護士には作者のオリジナリティーを守る活動に期待していますし、そんな考えが広まっていくことを願っています。

※ APOCC (Artistic Peace Operation for Connecting Citizens) は、普段芸術や文化を享受する機会のない人たちと、芸術に触れる喜びや尊厳を、「表現」を通して共有しようとする試みを行っている NGO 組織。これまでにインド、ドイツ、ベトナム、日本でワークショップを開催している。

プロフィール ほしの・ひろみ

1966年東京都生まれ。香港返還前後の2年間、香港で暮らした体験を書いた『転がる香港に苔は生えない』で第32回大宅壮一ノンフィクション賞受賞。著書に『謝々！チャイニーズ』『銭湯の女神』『のりたまと煙突』『迷子の自由』、写真集に『華南体感』『ホンコンフラワー』がある。最新刊は1987年の中国旅行を描いた『愚か者、中国をゆく』。週刊朝日でエッセイを連載中。